

岡田紅陽作品の撮影位置推定

成蹊学園サステナビリティ教育研究センター/教職課程センター/理工学部 宮下 敦



地域の自然環境についての知識を増やしたり、自然の景観を楽しんだりして、その価値を感じることは、地域社会をまもり育てていく動機の一つとなるものと考えられます。成蹊学園サステナビリティ教育研究センターの附属機関である成蹊気象観測所は、成蹊中学・高等学校での学習のためだけでなく、地域のかたたちにも気象データ、熱中症指数、あるいは富士山や東京タワーが見えた日数などを、インターネットや武蔵野市市政統計資料などで提供し、自然環境について知る方法の一つとして利用して頂いてきました。

筆者は、富士山が見えるかどうかの観測なども含めて長く気象観測業務に携わりましたので、富士山が見える景観にも興味を持っていました。武蔵野市立吉祥寺美術館で、「岡田紅陽 富士望景 - 武蔵野から」という企画展示¹⁾が、2020年8月8日から9月22日までの会期で開かれることを知り、興味を持って鑑賞に伺いました。

・岡田紅陽 富士望景 - 武蔵野から:http://www.musashino-culture.or.jp/a_museum/exhibitioninfo/index.html

岡田紅陽氏(1895-1972)は世界的に有名な富士山の写真家で、紙幣の富士山図案原版になる写真や関東大震災の記録写真の撮影者としても著名な方です。展示解説によれば、岡田氏は晩年の1961年から亡くなるまで武蔵野市にお住まいで、井の頭公園近くのビル屋上などから富士山の撮影をされていたとのこと。今回の企画展示では、岡田氏の代表作とあわせて、ご遺族から寄贈された、武蔵野市で撮影された富士山の作品を中心とした展示となっています。成蹊気象観測所では高等学校校舎屋上から富士山が見えるかどうかの観測を1963年から開始していますが、岡田氏が武蔵野市内から撮影していた期間の東京は大気汚染がひどく、朝9時に武蔵野市から富士山が見える日数は、1963年～1972年の10年間で平均43日ほどでした。2003年～2012年までの10年間の平均は約101日ですから、現在の半分未満の日数しか見えませんでした。展示リスト1番の「山頂落日」という作品は、1969年1月23日に市内から富士山頂に沈む夕日を撮影した作品で、今でいう「ダイヤモンド富士」の構図です。日の入りの方角は季節によって変化し、冬は真西よりも南側になり、冬至の頃が一番南側になります。そこで、武蔵野市で日没の場所が山頂と一致してダイヤモンド富士を見ることができるのは、冬至をはさんで約1か月前と約1か月後の2回しかありません。夕方に雨や雪が降っていたり、東京の天気がよくても富士山が雲をかぶっていたりすると、ダイヤモンド富士を見ることはできません。毎日、武蔵野市から富士山を観測していても、写真におさめることが難しい景色です。大気汚染で富士山が見えにくい時期にこの光景を撮影するために、根気よくチャンスを待たれたのに違いありません。市内から長年富士山を見ていた者として、プロフェッショナルのお仕事に深く感動しました。

また、作品リストの15番目は「武蔵野周縁」という作品で、展示解説では撮影地が未確定とのことでした。この作品は企画展示のホームページにも掲載されていますので、この画像と成蹊学園から撮影した富士山の画像と比較してみると、手前の丹沢山系から秩父連峰への山並みの形が違うことが分かりました。撮影場所によって見える山並みの形は変わりますが、武蔵野市から見た富士山を含む山並みとはうまく合わないように思いました。そこで、企画展示を紹介するのに合わせて、撮影地未定の作品があることもSNSで知人にお知らせしてみました。すると、これを見た成蹊高等学校天文気象部OBの高松覚氏から、この作品が裏焼ではないか、という



「武蔵野周縁」の正しい向きの画像(左)と成蹊学園から見た富士山の画像(右) 富士山と丹沢山系蛭ヶ岳の位置関係が、2つの画像で違うことが分かる。

指摘がありました。写真の裏焼というのは、ネガフィルムからプリントを作成する際に、ネガフィルムを裏返しの状態焼き付けしてしまい、本来の画像とは左右や上下が逆の画像になってしまうことを言います。素人ならありえる話ですが、高名な写真家の作品が裏焼というのは、にわかには信じられませんでした。東京から富士山を見ると、カメラは西向きで撮影することになりますから、撮影された画像の左側が南、右側が北になります。高松氏の指摘は、「武蔵野周縁」の作品の畑の畝の影が左側にできていて太陽の光が北側から照らしているように見えること、富士山の地形が東京から写したものと逆向きになっていることが根拠でした。この特徴は確かに裏焼写真です。高松氏は、高等学校卒業後も、お仕事のかたわら天体写真の撮影を続けているベテラン天体写真家です。天体写真のネガフィルムは真っ白で目で見るときに画像がみえにくいので、写真店などで焼き付けをしてもらって裏焼になってしまうことが時々ありました。ベテランの天体写真家の経験が、この作品の裏焼を見抜いたのです。実は、この作品のプリントは、岡田氏が自ら作成したものではなく、他界された後にご遺族が発注し、それが武蔵野市に寄贈されたものとのことで、その際の手順で裏焼になったものと思われます²⁾。その後、今回の企画展示まで気づかれたかたはどなたもいなかったとのことで、まさに「みれどもみえず」のよい例です。

そこで、画像処理ソフトを使って左右を反転してみると、山並みの形も見慣れたものに戻りました。これで撮影地の推定が可能になります。現在は、地形情報もデジタル化の時代で、標高データをもとに3次元の地形を再現できる「カシミール3D」といったシミュレーション・ソフトが開発されています。正しい向きの「武蔵野周縁」には、富士山の南側に丹沢山系の蛭ヶ岳が写っていますが、武蔵野市内から撮影すると、蛭ヶ岳は作品よりもさらに南側(図を参照)になります。これは、この作品の撮影位置が武蔵野市よりも東側にあることで説明できます。あまり東にいくと、今度は東京の山の手に入ってしまうので「武蔵野周縁」ではなくなってしまいますから、吉祥寺の東側でかつ南よりの可能性があります。そこで、吉祥寺から交通の便のよい京王線や小田急線沿いではないかと考えて、シミュレーション・ソフトで、色々な場所から見た富士山の画像を作って比べてみました。高松氏も、同じようにシミュレーションをしてみて、京王線仙川駅から南1kmほどの地点から撮影すると、作品とほぼ同じ景色になることをつきとめました。インターネットで富士山が見える景色の画像を検索してみると、高松氏が推定した地点の近くからの画像が見つかり、推定はおおむね間違いないことが分かりました。

撮影地点がある程度絞れた段階で、地理・地図の研究者で、富士山を含めた山岳展望や山座同定の第一人者である、日本地図センター相談役の田代博先生に連絡をとりました。田代先生は、富士山が見える最遠地点からの画像の鑑定などで活躍されていますので、こうした画像の正確な鑑定をお願いするには最適のかたです。田代先生が高松氏の推定地点画像を精査した結果、高松氏の推定地点からもう少し東側の上祖師谷付近の方が、より作品の画像と一致するという結果がでました³⁾。これでほぼ確定ですが、地形シミュレーション・ソフトは、大気による光の屈折なども精密に計算しているものの、気温などによる見え方の変化を完全に再現することはできません。この作品が、田代先生の推定した地点から撮影されたものであることを決めるためには、富士山が見える日に同じ地点から撮影してみて、ほぼ同じ画像になるかどうかを確認する必要があります。現時点では、作品「武蔵野周縁」は、世田谷区上祖師谷付近から撮影された可能性が高い、ということになりますが、科学的な結論ということになります。こうした経緯を、吉祥寺美術館の滋野佳美氏にお知らせしたところ、会期中中であるにも関わらず解説を追加し、それをSNS等で周知して頂くことができました。地域の美術館ならではの臨機応変なご対応と思います。

これまでに述べたような、岡田氏の作品「武蔵野周縁」の撮影地の探索は、作品の生い立ちを知るうえで必要な作業です。しかし、撮影地がどこであっても、この写真は、雑木林に囲まれた家々や畑が残り、そこから富士山が遠望できる武蔵野の情景を切り取った素晴らしい作品です。作品に見入っていると、あたかも半世紀以上前の武蔵野にいるような感覚を呼びおこしてくれます。武蔵野が育んできた歴史をふりかえって、これからの地域のあり方を考えてみるのもよいかもしれません。2020年はCOVID-19で社会が危機にありますが、このような時こそ心の栄養が必要です。岡田紅陽作品を観ながら富士山を周遊する空想をしてみるというのも楽しみ方の一つと思います。ぜひ、企画展示にお越し頂き、岡田紅陽氏の写真の世界を鑑賞して頂くことをお勧めします。

<参考ページ>

- 1) 岡田紅陽 富士望景 - 武蔵野から
http://www.musashino-culture.or.jp/a_museum/exhibitioninfo/index.html
- 2) 「武蔵野周縁」についての追加解説
http://www.musashino-culture.or.jp/a_museum/exhibitioninfo/武蔵野周縁%20正しい情報と分析について0816.pdf
- 3) 田代博先生による(武蔵野周縁)撮影地推定に関する web ページ
<http://yamao.lolipop.jp/tenbo/20/koyo/musashino.htm>
- 4) 成蹊学園サステナビリティ教育研究センター・ホームページ
<https://www.seikei.ac.jp/gakuen/esd/>

筆者のプロフィール

宮下 敦 (みやした あつし)

成蹊学園サステナビリティ教育研究センター⁴⁾ / 成蹊大学教職課程センター/ 理工学部共通基礎 教授

日鉄鉱業(株)勤務後, 1989年から成蹊中学高等学校理科教諭と成蹊気象観測所担当を兼任. 2018年から現職. 専門は, 理科教育学, 岩石学, 鉱床学, 科学史. 現在は, 成蹊教育と地球科学を中心とした理科教育と, 日本列島の岩石や鉱床の成因について研究している.

ずっと未完成の web ページ: <http://earthprobe.blue.coocan.jp/>